

# 博士論文審査結果報告書

高林友美

コミュニケーションとしての学び

ー自律的学習の構造モデルの提案と検証ー

Learning as Communication:

Development and Validation of the Self-Directed Learning Model

(2018 年、155 頁)

## 審査論文の要旨

本論文の目的は、学びをコミュニケーションのプロセスとして捉え、これまで複数の領域に散在していた自律的学習の構成要素を文献研究によって整理し、それによって得られた自律的学習の構造モデルを実証的に検証することである。

序章で本研究の意義について述べた上で、第 1 章で文献のレビューを行っている。文献レビューの最初の部分では、自律的学習の観点から複数の領域（教育哲学、言語教育、成人教育、スポーツ科学、看護教育、教育心理学、教育工学）の文献を詳細に調べている。文献研究の結果、哲学的自律的学習、専門的自律的学習、総合的自律的学習、そして双方向的自律的学習の 4 つの類型にまとめている。さらに、これらの 4 類型の特徴を分析した結果、自律的学習の要素として、1) 積極的にコミュニケーション方略を使う、2) 適切な学習メディアを使う、3) 学習環境を整える、4) モチベーションを管理する、5) 学習行動を習慣化する、6) 学習内容に批判的な思考を適用する、7) 自分を観察する、の 7 つの行動があることを示している。

第 2 章では、前章の文献レビューに基づき、次の 2 つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定し、これらを検証するための方法論を、研究全体のコンセプトマップとともに示している。

RQ1: 自律的学習の要素は、行動による 7 分類で説明できるのか。

RQ2: 分類された自律的学習の各要素は、学習成果とどのように関係するのか。

これらを検証するための質問紙は、フェイスシート、学習成果の自己評価、コミュニケーションスキル尺度、メディアリテラシー尺度、自己調整学習方略尺度、そして自律的学習の 7 要素に関する項目で構成され、研究倫理に配慮しながら首都圏の国公立大学の学部生を対象に調査を実施している。この質問紙調査から得られたデータの分析にあたっては、因子分析、および共分散構造分析の手法を採用している。

第 3 章では、前章で述べた方法に従って行われた調査の結果を記述している。首都圏にある依頼可能な国公立大学 6 校の学部生を対象に質問紙調査を実施したところ 549 名から回答を得ることができ、そのうちの 508 名の回答が有効であった。この調査から得たデ

ータを利用し、リサーチクエスチョン1と2の検証を行っている。

まず、リサーチクエスチョン1を検証するために因子分析を行っている。その結果、提案した7つの要素のうちのモチベーションの要素と習慣化行動の要素が1つに集約され、6つの因子による自律的学習の構造が明らかになった。

次に、リサーチクエスチョン2を検証するために共分散構造分析を行っている。その結果、リサーチクエスチョン1で得た6つの因子全てが、学習成果に対して有意に正の影響を持つことが明らかになった。こうして、実証的データに基づく自律的学習の構造モデルを提示している。さらに、リサーチクエスチョン2の分析で得られたモデルを応用して、普段のコミュニケーション態度に関する変数を2種類加えたモデルを構築している。これにより、コミュニケーションに対する態度が、自律的学習全体に正の影響を持ち、この影響が学習成果にも結びついていることが分かった。

第4章では、前章で得られた結果の総合的な考察を行った上で、6つの自律的学習の構成要素に関連する方略を組み込んだ「自律的学習サイクルの一般モデル」を示した。そのモデルの中で、主要な2つの段階（「手を伸ばす」、「手に入れる」）を提案している。つまり、学習者は、対人接触方略、メディア切り替え方略、メディア環境方略の3つの方略によって、他者および他者のメッセージを運ぶメディアに対して自分から「手を伸ばし」、その後、学習者は批判的思考方略と自己モニター方略の2つの方略によって学習内容を「手に入れる」という2つの段階である。そして、6つ目の行動維持方略によって、「手を伸ばす」段階と「手に入れる」段階の2つがサイクルとしてまわり続けると論じている。

終章では、論文全体をまとめた上で、今後の課題に言及し、学習効果の定義の曖昧性や、異なる文化における自律的学習の意味の問題などを指摘している。

## 審査の総評

本研究では、学びをコミュニケーションのプロセスとして捉え、多領域にわたる自律的学習に関する研究を入念に整理し、それによって得られた自律的学習の構造モデルを実証的に検証することに成功している。その結果として提示された「自律的学習サイクルの一般モデル」は、自律的学習者がどのように行動しているのかを分かりやすく示しており、この論文のもっともユニークな点であると言える。この斬新なモデルは、メディアが加速度的に進化する現代社会において、自律的学習者の育成という観点からその有用性が期待される。

本論文のテーマは重要ではあるが、対象となる領域が広範囲にわたるため、研究を行う上では大きなチャレンジであった。どの程度具体的な研究成果を得ることができるかが課題であったが、先行研究のレビュー、先行研究に基づいたリサーチクエスチョンの設定、妥当な研究手法によるリサーチクエスチョンの検証、そして研究結果に対する深い考察という基本的な研究手法を地道に行うことによって、オリジナリティーの高い具体的な成果を出すことができたと言える。審査委員会のメンバーは全員一致で、本論文が博士（コミュニケーション論）の学位に十分値するものと判断する。